4 動詞 ② 変格活用

詳説 古典文法 改訂版 24〜27ページ

正格活用と変格活用

四段・上二段・下二段・上一段・下一段の各種類の活用を、正格活用と呼ぶことがある。変格活用は、正格活用の一部が異なるか、あるいは複数の正格活用が組み合わさったものとみることができる。

活用の種類と活用の仕方

◎カ行変格活用

o／i／u／u／ure／ure／oよ

＊属する語は「来（く）」一語のみである。

＊語幹と語尾の区別がない。

◎サ行変格活用

e／i／u／ure／ure／eよ

＊属する語は「す」「おはす」の二語のみである。

＊「す」には、語幹と語尾の区別がない。

＊他の語と結びついて多くの複合語を作る。

◎ナ行変格活用

a／i／u／ure／ure／e

＊属する語は「死ぬ」「往（い）（去）ぬ」の二

1 次の動詞の活用表を完成させなさい。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の行
来	（　）							行
す	（　）							行
往ぬ								行
居（を）り								行

2 次の動詞の活用の行と種類を答えなさい。

① 具（ぐ）す　② 死ぬ　③ 侍（はべ）り

④ 論ず　⑤ 出（い）で来（く）　⑥ いますがり

①	③	⑤
行活用	行活用	行活用
②	④	⑥
行活用	行活用	行活用

3 次の（　）内の動詞を適切な活用形に直し、すべてひらがなで答えなさい。

① 「たれたれか（侍り）」と問ふこそをかしけれ。（枕草子）

「（帝のそばには、）誰と誰がお仕えしていたのか」と尋ねるのも趣深い。

② すぐれて時めきたまふ（あり）けり。（源氏物語）

特別に寵愛される

ヒント

1 ➡24〜27ページ

サ行変格活用「す」は連用形が下二段活用と異なる。ナ行変格活用「往ぬ」は連体形と已然形が四段活用とは異なる。ラ行変格活用「居り」は、終止形が四段活用とは異なる。

2 ➡24〜27ページ

①音読みの漢字＋す＝サ行変格活用。

②ナ行変格活用の動詞は「死ぬ」「往ぬ」の二語だけ。

③ラ行変格活用の動詞は「あり」「居り」「侍り」「いますがり（いまそかり）」の四語だけ。

④「す」が「ず」になる場合も「ザ変」とはいわず「サ変」。

⑤カ行変格活用は「来」の一語だけ。ただし「他の動詞＋来」の複合動

語のみである。

＊ナ行に活用する四段動詞はない。

◎ラ行変格活用

a／i／i／u／e／e

＊属する語は「あり」「居(ゐ)り」「侍(はべ)り」「いますがり（いますかり・いまそがり・いまそかり）」の四語のみである。

まぎらわしい動詞

◎ナ変とまぎらわしい動詞

- 死す→サ行変格活用。
- 往(ゆ)く→カ行四段活用。
- 寝(い)ぬ→ナ行下二段活用。

◎ラ変とまぎらわしい動詞

- 居(ゐ)る→ワ行上一段活用。

③ 前栽(せんざい)の中に隠れゐて、河内(かふち)へ（往ぬ）顔にて見れば、（伊勢物語）
（男は女を疑って、）庭の植え込みの中に隠れていて、

④ 知らず、生まれ（死ぬ）人、いづかたより来たりて、いづかたへか去る。（方丈記）
知らない、生まれ、（そして）死ぬ人が、どこから来て、どこへ去るのかを

①	②	③	④

4 次の傍線部の「来」の読み方をひらがなで書きなさい。

① 月の都の人まうで来ば、捕(とら)へさせん。（竹取物語）
月の都の人たちがやって参りましたら、捕らえさせよう。

② 田舎だちたる所に住む者どもなど、みな集まり来て、（枕草子）
田舎めいた所に住む者たちなども

③ 「海賊追ひ来」ということ、たえず聞こゆ。（土佐日記）
「海賊が追って来る」というわさが

①	②	③

5 次の各文中からサ行変格活用の動詞を抜き出し、その活用形を答えなさい。

① 道来る人、「この野は盗人あなり」とて、火つけむとす。（伊勢物語）
「この野には盗人がいるそうだ」　今まさに火をつけようとする。

② 馬のはなむけせむとて、人を待ちけるに、来ざりければ、（伊勢物語）
送別の宴会をしようと思って　（その人が）来なかったので

③ 聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。（徒然草）
（うわさに）聞いていた以上に

④ 恋しくは形見にせよと我が背子(せこ)が植ゑし秋萩(あきはぎ)花咲きにけり（万葉集）
恋しくなったら、（私のことを思い出す）形見にしなさいと言って、あなたが植えた

①	②	③	④
形	形	形	形

詞は多数ある。
⑥③参照。

3 ➡16～23・24～27ページ
①「　」内は一つの文として完結する。すぐ上に係助詞「か」があるので、連体形で結ぶ。
②直後に連用形接続の助動詞「けり」がある。
③直後に「顔」（名詞）がある。
④直後に「人」（名詞）がある。

4 ➡24ページ
①直後に接続助詞「ば」がある。「ば」は未然形または已然形に接続する。ここでは「来れ」ではなく「来」と表記されていることに着目。
②直後に連用形接続の接続助詞「て」がある。
③会話文の文末である。

5 ➡25ページ
サ変動詞の活用に該当するひらがなをマークし、順にサ変動詞であるかないかを検討する。

10 助動詞 ① る・らる・す・さす・しむ

詳説 古典文法 改訂版 52〜55ページ

る・らる

接続

る ＝四段・ナ変・ラ変型動詞の未然形。
らる＝右以外の動詞の未然形。

● 直前がア段音なら「る」、それ以外は「らる」。

意味

受身（〜レル・〜ラレル）
尊敬（〜レル・〜ラレル・〜ナサル・オ〜ニナル）
自発（〈自然ト〉〜レル・〜ラレル）
可能（〜デキル・〜レル・〜ラレル）

◎意味の判別

● 受身→人が主語で、動作を受ける相手に「に」がつく。
● 尊敬→主語が身分の高い人の場合に用いられる。
● 自発→心情・知覚を表す動詞や、心情に促される行為を表す動詞とともに用いられる。
● 可能→打消や反語表現とともに用いられる。

1 次の助動詞の活用表を完成させなさい。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の型
る							下二段型
らる							

2 次の（　）内に助動詞「る」「らる」のいずれかを適切に活用させて入れなさい。

① 住みなれしふるさと、限りなく思ひ出で（　）。（更級日記）
② 先陣二百余騎押し落とさ（　）、水におぼれてうせにけり。（平家物語）
③ 思ふ人の、人に誉め（　）は、いみじううれしき。（枕草子）

① ［　　］
② ［　　］
③ ［　　］

3 次の傍線部の助動詞の文法的意味を答えなさい。

① むげなことを仰せらるるものかな。（徒然草）
むちゃなこと
② 湯水ものどへ入れられず。（平家物語）
③ 舎人（とねり）が寝たる足を狐（きつね）に食はる。（徒然草）
④ 人知れずうち泣かれぬ。（更級日記）

① ［　　］
② ［　　］
③ ［　　］
④ ［　　］

ヒント●

1 ↓52〜53ページ

2 ↓52〜53ページ
① 直前の「思ひ出で」は下二段活用。
② 直前の「押し落とさ」は四段活用。直後は「、」なので、連用形にする。
③ 直前の「誉め」は下二段活用。直後に係助詞「は」があるので、連体形にする。

3 ↓52〜53ページ
①「仰せ」は尊敬の動詞。身分の高い人に用いられる。
② 直後の「ず」は打消の表現。
③ 直前にある「狐に」という語に注意する。
④「うち泣く」は心情を表す動詞。

す・さす・しむ

接続

す　＝四段・ナ変・ラ変型動詞の未然形。
さす＝右以外の動詞の未然形。
しむ＝活用語の未然形。

● 直前がア段音なら「す」、それ以外は「さす」。

＊「しむ」にはこのルールが適用できないので注意。

意味

使役（～セル・～サセル）
尊敬（オ～ニナル・～ナサル）

◎尊敬と使役の区別

● 直後に尊敬語を伴う場合は尊敬の意味になることが多い。

せ
させ　＋　給ふ
しめ　　おはします
→ 尊敬

＊ただし、直前に使役の対象がある場合はこの形でも使役になる。

● 右の尊敬の形以外（直後に尊敬語がない場合）はすべて使役である。

4 次の助動詞の活用表を完成させなさい。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の型
す							下二段型
さす							
しむ							

5 次の（　）内に助動詞「す」「さす」のいずれかを適切に活用させて入れなさい。

① ただ今、これより過ぎ（　）おはしますめり。（平家物語）
（帝は）ちょうど今、この家の前を

② 下部に酒飲ま（　）ことは心すべきことなり。（徒然草）
身分の低い人に

③ 夜うちふくるほどに、題いだして、女房にも歌詠ま（　）たまふ。（枕草子）
夜が更けるころに、題をお出しになって、

①
②
③

6 次の傍線部の助動詞の文法的意味を答えなさい。

① おろかなる人の目をよろこばしむるたのしみ、またあぢきなし。（徒然草）
つまらないものである

② いま一かへり、われに言ひて聞かせよ。（更級日記）
もう一度

③ 関白殿、黒戸より出でさせたまふ。（枕草子）

①
②
③

4 ⬇54～55ページ

5 ⬇54～55ページ
①直前の「過ぎ」は上二段活用。直後に尊敬の補助動詞「おはします」があるので、連用形にする。
②直前の「飲ま」は四段活用。直後に名詞「こと」があるので、連体形にする。
③直前の「詠ま」は四段活用。直後に尊敬の補助動詞「たまふ」があるので、連用形にする。

6 ⬇54～55ページ
①直後に尊敬語がない。
②直後に尊敬語がない。
③直後に「たまふ」という尊敬語がある。